
僕らの夏物語

蒼葉 樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの夏物語

【Zコード】

Z0278B

【作者名】

蒼葉 樹

【あらすじ】

五人の少年少女に起きた、ある夏の出来事の話。

「真也ー、じゅわーー！」

光がこっちへ向かって叫んでいる。背後にたくさんの向日葵を背負つて。

「早くー！未紅たちが待ってるよー！」

僕は光の元へ駆けて行く。

僕らは毎年光の田舎の向日葵を摘みに行く。
三年前から入院している未紅の、大好きな花を。

「今年もたくさん咲いてるね。未紅が喜びそう！」

向日葵のように光は明るく笑った。

「ねえ知佳、光たち、大丈夫かな」

病院のベッドに座る未紅が聞く。

「大丈夫！あの二人ならいつもみたいにすぐ帰つて来るからー！」「明日には帰れるって連絡あつたぞ」

病室の扉をガラッと開けて信悟が入つて来た。

知佳も信悟も僕らの親友だ。

僕らは小さい頃からいつも五人で一緒にいた。

「そっかあ。明日にはもつ会えるんだね」

未紅は小さく微笑む。

「きつと光がいつぱいの向日葵を背負つて来るわねー。」

病室には三人の明るい笑い声が響き渡つた。

「たつだいまーー！」

光が元気良く病室の扉を開けた。

「あ、光ーーおつかえりーー！」

僕らに気付いた未紅が手を振つていて。
横にいた知佳と信悟が駆けて来た。

「今年も凄い量だなあ」

「うちのばあちゃんとこのだもん！」

「ほらね未紅。やっぱり背負つて來たでしょ」

ベッドに座る未紅に向かつて知佳が笑う。

「ホント。ありがとね、光！」

「任せて！未紅の大好きな花だもんね」

光は到る所に向日葵を置いていく。夏になると病室が向日葵畑みたいになるわ、と看護士たちも喜んでいるのだ。

又一人、看護士が二コ二コしながら通り過ぎていった。

その時だつた。

未紅がいきなり咳き込み、そのまま床に転がり落ちた。

「おい、未紅！？」

「未紅ー！！」

信悟と知佳が同時に叫んだ。

僕の耳にも声が届き、急いで駆け戻る。

光は枕元に下がっていたナースコールのボタンを勢い良く押す。

「未紅が、未紅が…！」

喉に詰まつた声を力一杯出して叫んでいる。

しばらくすると担当の医師が現れ、緊急手術が行われた。

僕らはまだがまだかと震える心臓を抑えながら廊下を行つたり來たり、ベンチに座つて足を震わせたりしながら待つていた。

三十分もした頃だろうか。

手術室の扉が開けられ、医師や看護士たちが汗を垂らしながら出て來た。

僕らは一齊に医師の周囲に集まる。

「先生、未紅、大丈夫なんですか？」

医師の目の前にいた光が恐る恐る聞いた。

「皆さん、落ち着いて聞いて下さい」

医師の一言で、僕らの周りにいる辺り一面が沈黙と化した。

「未紅さんは、とても危険な状態でした。

いつ発作が起きてもおかしくなかつたんです

「そんな…」

知佳は冷たい廊下に崩れ落ちる。

「一体、どうこいつですか？」

知佳を支えながら信悟が尋ねた。

「未紅さんは夏休みに入る直前にも一度発作を起こしたんです。

しかしその時は、薬を飲ませて一時的に抑えました

「そ、それで？」

耐え切れなくなつた僕も顔を乗り出して聞く。

「その時の発作があまりにもひどかつた。

薬で抑えたと言つても簡単なことではありませんでした。

次に発作が起きてしまつたら、もう助かる確率はゼロに近かつた

そういうた医師も周りにいた看護士達も、少しづつ顔を青ざめていく。

「じゃあ未紅は、もう駄目だつたんですか？」

そう叫んだ光の声は、流れる涙と溢れ出した悲しみで震えていた。隣にいる知佳や信悟、僕の瞳にも今にも溢れそうな大粒の涙が溜まっている。

「『冥福を、お祈りします…』

そう言葉を残して医師たちはその場を立ち去った。
それとほぼ同時に僕ら全員の瞳から滝のように、涙が流れた。

それが、僕らと未紅の、最後の別れだった。

五年後、夏。

僕の家の電話がなつた。

「真也?」

「光?どうした?」

「急なんだけど、明後日向日葵採りに行かない?」

「…そっか、もうそんな時期か。久し振りだし、行こうか

「今年も暑いねえ」

光は額の前に手をかざしながら呟く。
電車の中も思ったより暑かった。

光の田舎まで、あと一時間ほど乗っていなくてはならない。

「けど、向日葵がぐんぐん伸びて行きそうな口差しだな
「そうだね」

小さく光も微笑む。

「私ね、このままじゃいけないって分かってるんだよ……」

「どうしたんだ、急に」

「ずっと分かつてた事なんだよ。

「私や知佳って、未紅の死を未だに引きずつてるでしょ？
もう戻つて来ないって分かつてるのに…」

光の目から透明な雫が垂れる。

僕は指でそつと光の涙を拭つてやつた。

「泣けるうちに泣いておけ」

安心したよ、光の瞳からは次々と涙が溢れ出る。

「ねえ真也、どうして信悟や真也は泣かずにいられるの？」
「俺たちだって、はじめは泣かずにいられなかつたよ。
けど今はお前たちを支えられる奴は俺たちしかいないだろ。
だから、しつかりしなきやなつて言つてたんだ。信悟と」

僕はまだ泣き止まない光の頭をそつと抱き寄せる。
しばらくすると光は眠りについた。

僕はゆつくりと光の頭を離し、窓の外を眺めた。

都会の景色から、だんだん田舎の景色へと変化していく。

山の中のトンネルに差し掛かった時、何かが僕の目に映った。
見覚えのある笑顔を持った、一人の少女だった。
はつとして正面を振り返る。しかし、そこには何もいない。
もう一度窓を見たが、そこに映っていた少女もすでに消えていた。

僕らは光の祖母たちに挨拶をして向日葵を摘みに行く。

日差しが強いせいか、向日葵はもう太陽に届いてしまつのではないかといつほど高く伸びていた。

「今年も伸びたねー」

すぐ近くに伸びる向日葵をさすりながら光が声をかける。
それを喜んでいるかのように、上のほうで咲いている花びらも小さく揺れた。

「天気も良いし沢山咲いてるし、良かったな」

「うん。未紅、喜んでくれるよね」

「当たり前だろ? 今年の向日葵は独り占めできるしな」

僕が少しあざけて言うと、光はあははっと笑った。
良かつた。ちゃんと笑えてる。

翌朝、僕らは沢山の向日葵を持って電車に乗り込んだ。
光は隣で眠っている。降りるまでは起こすから、と僕が促した。

「真也」

ふいに隣から声がした。

「まーさやー」

僕を呼んでいたものは、ひょいと田の前に現れた。
昨日も電車で見かけた、あの少女だった。

「未紅…」

「へへつ。久し振り!」

五年前の姿のまま、未紅が笑いかけてくる。でも、あの時とは違う、心からの笑顔を携えて。

「真也、大きくなつたね。光も」

「五年も経てばな」

僕らの話し声が聞こえていないのか、光はちつとも田を覚まさない。

「…急にどうしたんだって思った？」

ゆつくつと未紅は口を開く。

「ああ。五年も経つた今になつて、どうしてひょっこり戻つて来たんだ？」

「大きくなつた皆に会いに來たの。寂しかったのよ、今まであの頃も、早く病氣を治して又皆と大きくなるまで一緒にいたかった」

「お前、あの夏休みの前にも一度発作を起こしてたんだってな。医者から聞いたよ」

「ごめんね、隠してて」

未紅は顔を下に向け、じつとする。

電車は揺れても、彼女は揺れない。悲しい現実に、心が痛んだ。

「わたしね、実は…あの夏に死んでから、まだ天へ行つてないの」

「どういうことだ？」

「うん…。何故だかは、私にも分からないんだけどね。

姿が消えないの、ちつとも」

「そんな事、あるんだな」

僕も未紅も、それぞれが現実を受け入れられなかつた。

「未紅、ごめんな。俺たち結局、何も出来なかつた」

「そんな事無い！真也たちはいつも側にいてくれたじゃない。それだけで、凄く助けられたんだから」

「俺、ずっと未紅に会いたかつたんだ。光も、皆もそうだつた。今でも皆で集まると、未紅がいたらつて思うんだ」

それを聞いて、未紅はふふっと笑つた。

「良かつた。まだ一緒にいるんだ」

「当たり前だろ。腐れ縁だからな、俺たちは」

「でもね、それが一番心配だつたの。私の所為でみんなが離れ離れになつてたらつて」

「大丈夫だよ。俺たちは絶対離れないから」

「うん……」

話している僕たちを無視して、電車は着々と目的の駅まで進んで行く。

外を眺めて、未紅も僕も寂しくなつた。

それでも未紅は、笑顔で言う。

「真也、ありがとね。会えて嬉しかつたよ」

「うん。俺も。ありがとな」

僕も、満面の笑みを浮かべて言つ。

その時、未紅のからだの変化に僕は気付いた。

「未紅、からだが……」

「え？」

足下を見ると、少しづつ透けては消えて行く。

「そつか。私、皆の『今』を知りたかったんだ。
真也に会えて、皆を知つて。準備が出来たんだ」

田辺沢山の、透き通るほど綺麗な涙を浮かべて未紅は言つ。

「全部真也のお陰だよ。ありがとう」

「未紅、ありがとう。俺も、嬉しかった」

抑え切れずに流れる涙に笑顔を乗せて彼女は「ぐんと頷く。
あの時のままの、幼い笑顔で。

「真也」

からだの半分はもう消えてしまった姿の未紅は叫ぶ。

「皆に伝えて。これから先も、皆は離れないでつて。私の事、忘れないで、時には思い出してつて。

私はいつでも、皆を見てるから…」

「未紅ー！」

自分のできることは全てしたという満足の笑みを浮かべて、未紅
は大空へと旅立つた。

目の前にいたはずの未紅はもういない。空に、還つたんだ。

大丈夫。皆にさちやんと、伝えるよ。

ありがとな、未紅…。

「未紅、気持ち良いか？」

そう言つて真っ白なタオルで墓石を拭いているのは信悟だ。

「久し振りね」

「未紅の大好きな向日葵、持つて来たよ」

墓前に座つて光も知佳も笑つている。

今日は、未紅の命日。未紅が息を引き取つてから丁度五年が経つた。

光と一緒に採つて来た向日葵を持って、四人で墓参りに来たのだ。ここは僕らの家からも、そんなに離れていない。

だけど、周りを囲む木々の所為か、田舎にいるような気分にもなる。

僕は墓に火の点いた線香を置き、胸の前で手を合わせる。光や信悟、知佳もそれぞれの想いを胸に手を合わせていた。

「あの、さ」

皆が目を開いた頃、僕は電車の中での出来事を、ゆっくりと話し始めた。

「俺、未紅に会つたんだ。電車の中で」

「どういうこと?」

「私が眠つてた時?」

知佳や光が口々に聞く。

「で、どうしたんだ？」

信悟も先を促す。

「未紅、ずっといたらしいんだ、この世に

僕は話した。

未紅の靈を電車の中で見かけたこと。
実際に話したこと。

そして、成仏していくこと。

皆は真剣に聞いていた。その瞳には、何の疑いも無かつたことを
嬉しく思つ。

「そうか。やっぱ未紅も寂しかったのかあ」

「未紅って、寂しがり屋だったわね、そりいえば」

知佳は目を細めて微笑む。

「未紅、伝えて欲しいことがあるって言つてたんだ」「
何て？」

「未紅、俺たちがずっと一緒にいることを望んでたんだ。
だから、これから先も離れないでってさ」「
離れないで…って心配する必要ないのにね」

光も笑顔になつて言つた。

「あと、未紅のこと忘れないでって。時には思い出してつけて

「未紅…」

耐え切れずにつとうとう知佳は涙を流した。

「俺たちが忘れるわけ無いよな」

知佳の背中をさすりながら信悟も呟く。
そんな信悟の声も、涙の所為で震えていた。

「未紅！」

光が墓に向かって叫んだ。

「私たち、大丈夫だよ！絶対離れないよ！
未紅のこと忘れないし、いつも未紅の笑顔、思い浮かべるよー。」

流れそうになる涙を必死にこらえながら叫ぶ。

「未紅　！」

光の最後の叫びによって、皆の瞳から滝のように涙が溢れた。
未紅の死を知られた、あの口のようになってしまった。

未紅にはもう会えない。もう、話せない。

それでも僕らは大丈夫。

だって、いつでも未紅は、空の上から僕らを見ていてくれるから。

真夏の暑い空の下。

四人の瞳からは、滝のように溢れる涙。

五年前の夏に消えてしまった、親友の命を想つて。

「皆、ありがとうー！」

空の上から、未紅の声が聞こえた。

そんな、気がした。

The End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0278b/>

僕らの夏物語

2010年11月6日13時45分発行